1969.4.24
明治大学新聞

私は乱暴・逮捕された

その時はこうだった

▽その1

三階の法律研究部。幹事長の松崎光則君（法三）と斎藤克則君（法三）が部屋に入ったのは機動隊の乱入する約十分前であった。新入生勧誘のパンフを謄写版ですろうとしたその瞬間に機動隊員十数名が踏み込んだ。「何やってんだ」「ガリ版すってるところだ」「じゃすってみろ」というわけで最初の一枚を試みようとした。その間、後から来たゲバ棒を持った一人の隊員が、棒の先端で松崎君の胸をつっついた。「よせョ」と振り向くと、「なぐる、蹴るのメチャクチャな暴行」（両君談）。楯でなぐられて、松崎君は額に傷を負い、斎藤君は口びるが裂けたそして公務執行妨害で逮捕。いくら弁解しても聞いてくれない。額から血がしたたる。丸の内署に連れて行かれ、そこではじめて医者を呼んで手当てをしてもらった。「金治一週間ぐらいじゃないですか」と同君はいう。

十三日午後零時半釈放される時「不当逮捕か」と聞くと「違う」というし、「じゃ僕が何かしたのか」といえば「チガウ」という。「容疑の裏付けができなかったから釈放するというが、その容疑を明確にして謝罪を要求する」と憤慨。さらに「日大の学生が学館に逃げ込んだということは別問題でその場で弁解も何も聞かないで連行するのは人権無視だ」と強い口調で抗議する。法研の学生が法の番人（？）たる機動隊に不法行為をされた――皮肉といえば皮肉な現象。大学の自治を守るために何らかの策を講じてほしい。吉朗文だけでは何にもならない。近頃、頻繁に機動隊が学館に入っているし、エスカレートしている。何とかしてもらわないと困る」。

▽その2

文学研究会の山村俊太君（経営三）は旧学館四階の部室で、サークル員松本君（文三＝この時同君は不在）の友人二人、計三人で新入生勧誘のビラ作りをしていた。ドアにはカギをかけていなかった第二機動隊三人が部室に入って来て「出て行け」と怒なった。「何もやってない。ここは僕らの部屋であるし、居てもいいじゃないか」と抗議したが、止むなく廊下へ出た。二人は無抵抗のまま乱暴され最後に出た山村君も部室から一歩踏み出すや否や「文句があるなら警察でいえ」と その場で逮捕された。「連行される途中の狭い廊下で、両側の機動隊に足で蹴られたり、こずかれたり、木の盾で頭をなぐられ たり」筆舌には尽し難いという。こうして山村君は丸の内署へ。供述書を書いて釈放されたのは、翌十三日の午後三時である。「他の二人は混乱していたので、どうなったのかわからない。」「安保前なので、一人でも多く逮捕しようとする意志が露骨だ。不当逮捕は権力の乱用ですね」。今でもフンマンやる方ない。

▽その3

同じく四階の日本民謡研究会では、幹事長の西山満夫君（商三）をはじめ佐々木健君（商三）、片岡弘行君（政経三）、平沢徹（文二）の四人がいた。新入生催誘のポスターを作成していたが、機動隊が来そうな気配だったので、一人が外からドアのカギをかけ、窓から入った。そして窓のカギも内からかけた。やがて第一機の機動隊がドアを蹴やぶり、窓ガラスをガス銃の先端でたたき割って四君を見つけ、「いるぞ、いるぞ」と叫んだ。佐々木君が「何するんだ」と乱入する機動隊員に向うと、「何だ、その態度は」と逆に怒なり返し、足で蹴ったり、警棒で頭をなぐったりした。そして、石を投げたかどうか手を調べたが、四君の懸命の弁解で機動隊員はやっと了承。「静かに待っていなさい」といい残して出ていった。だが一、二分後この間の事情を知らない別の隊員約二〇人が踏み込んで来て、廊下へ並ばせた。そこで佐々木君らは学生証を見せ、何にもしてないということをいい聞かせて、ようやく四人だけ学館の外へ出してもらった。「自分の大学の自分の部屋にいることが何で悪いのか。大学の自治とはこんなものなのか」。

▽その4

山岳部は五階。今春本学を卒業したコーチの吉本修君と高路昭雄君（商三）は十二月午後四時ごろ学館に着いた。「別に何もやっていたりした」（吉本君談）。機動隊が学館に入りそうだったが、その時はすでに出入口はふさがれ出なかった。窓から外の模様を見て るに出れない状態であった。五時十五分、第四機動隊がドアをけ破って部屋に侵入して来た。ドアはカギはかけてなかった。引けば何なく開いたのに、機動隊は押すことだけにしかノウがない。二人はイスに腰かけていた。「立っていたら何をされるかわかったものではなかったから」。そして、その場で逮捕された。逆わなかった。話せばわかってもらえると思ったからだ。麹町署では「投石したり、ビンを投げた疑いがある。抵抗した」と調書には書かれた。「とんでもないですよ」と一笑にふす。そして釈放されたのは高路君が十四日の午後四時、吉本君は同五時である。吉本君は「日大生にかき回されたのではクラブの運営ができない。毎晩泊り込んでいるのはハタ迷惑だ。学館の管理をしっかりやってほしい。また警察の調べは人を罪人にしたてあげることしか考えない。もっと正しくスピーディにやってほしい。何も何んにもしない者を一晩泊めなくったっていいじゃないか」と学生と警察双方を批判する。

▽その5

「われわれ十三名は青い血液の流れる犬どもに不当なる逮捕をされた」と強い口調でぶちまけるのは大量不当逮捕者を出した劇団「現世代」のうちの一人、川端引行君（文二年）。その日、四時から十三人は新学館の地下練習室で、次回公演（「ハムレット」＝五月十三日開演）のため練習中であった五時すぎ、いきなりガス銃をかまえた機動隊員二人が、部屋に入ってきて、「日大のやつらだろう」と放言した。練習中であることを告げると、二人は了解して引き上げた。そして五時二十五分、十数人の隊員が「ここにいたぞう」となだれ込んだ。「動くな」「喋るな」といいながら人数を数え、外に連れ出した。「麹町署まで護送どころか誤送をされた」。写真・調書をとられ、プライベートな所持品をすみずみまで検査された。そしていったのだ。「どうして退去命令に従わなかったのだ？」ところが川端君は「われわれはそういう勧告など一言も受けた覚えはない」と言う。十一人はその日のうちに釈放され、残りの二人も夜十時すぎに帰宅が許された。即日釈放されたのは幸運だった」といい、「われわれの人数がもっと少なかったらどうなったろうか」とあまりの機動隊のいき過ぎに憤る。最後に「この不当逮捕に対して、単なる憤りに終るのでなく、〝権力〟というものをシヴィアーに見つめ、そこから逆にわれわれの日常における自己像を突きつめてゆえて行く必要があるのではないか」と力説する。